

学際的なセルフビブリオグラフィック・
インストラクション・ガイドの構築
Construction of Interdisciplinary Guide for Self
Bibliographic Instruction

市 古 健 次
Kenji Ichiko

Résumé

This paper discusses a guide of a self learning system for library use and information retrieval. The guide consists of six categories, which are derived from the processes of research and information retrieval. These categories are understanding of topics and disciplines, know-how of information retrieval, searching books & articles, fact findings, proof, and writing papers. Reference books are arranged by these categories in the guide. The guide focuses on multi-, cross-, trans-, and inter-disciplinary studies for students. Accordingly, its arrangement is different from Sheehy's *Guide to Reference Books*, which is arranged by disciplines and edited for librarians. This article suggests that it is necessary to develop self BI guide based on cognitive science in order to make up for a deficit in one-shot lecture BI and reference service, and regards a self BI guide as an intermediate between them. It also focuses on users' independence from librarians in information seeking. There is a liberation from library anxiety in the background of a construction of the self BI guide.

- I. はじめに
- II. 論文作成過程と文献探索過程
- III. 図書館・文献探索法についての知識の提供
 - A. ゼミに沿ったBI
 - B. 分野別ガイドと学際的ガイド
- IV. 学際的なセルフBI・ガイド
 - A. セルフBI・ガイドの性格
 - B. セルフBI・ガイドの構成
- V. おわりに

市古健次：慶應義塾大学三田研究教育情報センター，東京都港区三田2-15-45.

Kenji Ichiko: Mita Library and Information Center, Keio University, 2-15-45. Mita, Minato-ku, Tokyo.

1989年10月13日受付

I. はじめに

情報量の増加、情報メディアの多様化、情報への依存、情報過多、情報の産業化、図書館の巨大化という状況において、米国では“Library Anxiety”（図書館利用不安症候群）と言う言葉が使われるようになってきており、その言葉は、利用者が図書館を利用する時、図書館・文献探索法が分からず、利用者が不安に陥る状況を的確に表現している。図書館・情報学においても図書館員や研究者が心理的な側面に関心を持ち始めている¹⁾。こうした言葉の出現は、図書館の概略サービスを主体としたオリエンテーション、文献探索に重点をおいたビブリオグラフィック・インストラクションや、それらに用いるメディアの多様化、さらにレファレンス・サービスがあるにも関わらず、効果的な指導の困難さを示している。

大学図書館では、オリエンテーションやBIを企画し、学生の図書館利用不安症候群からの解放を目指している。そして各種の利用指導はサービス対象、目的に見合った形での実施が理想的である。大学図書館は、学部生、大学院生、教員をそのサービス対象とし、授業・カリキュラム、論文作成、研究に対して支援し、それぞれに必要な資料を選書・収集し、コレクション・デベロップメントを展開している。それに並行して閲覧・貸出、レファレンス・サービス、利用指導を行なっている。授業・カリキュラムとの関係における図書館利用不安は、授業で使うテキストや、先生が授業で紹介した図書が図書館で探せない場合が想定される。その場合は、著者、書目録カードや、OPACの使い方を知っていれば解決する。その役割を演じているのがオリエンテーションである。学部生の論文作成であれば、求めていることは、論文作成に必要な図書・雑誌論文の探し方であり、原資料を多用する研究では資料の探し方や所蔵である。こうしたことに関わる利用不安はBIやレファレンス・サービスで解決可能である。

特にここでは、学部生や大学院生が論文を作成する際に陥る利用不安を解消するためにBIを取り上げて見ることにする。効果的なBI開発の模索の中にあって、本稿は、論文作成と文献探索過程、学習過程に焦点をあて、その中からBIの構成要素を求め、新しい包括的、総合的なBIのガイドを構築するものである²⁾。

II. 論文作成過程と文献探索過程

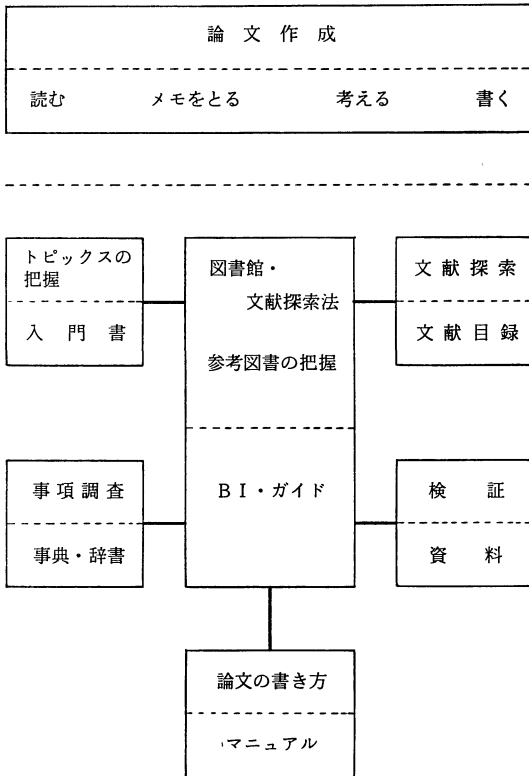
論文作成は、自分の興味のある書物を読んでいて、そ

の中で特に関心や疑問を持った点を詳しく調べようと言う動機から始まる。論文作成の定型を求めることは学問分野によって異なるため困難であるが、「おおよそすべてにあてはまることだと思いが、科学的認識は次のような順序でなされるもの」であり、それは、「問題を設定したら、観察—仮説の導出—検証または実験による仮説の検証—理論化」³⁾である。

論文作成については、多くのハンドブックが出版され、論文作成の過程、即ちテーマの設定から論文の書き方まで、学生に書く手掛かりを提供している。そこで簡潔に述べているMLAのハンドブック、*MLA Handbook for Writers of Research Papers*⁴⁾に基づいて論文作成の過程について紹介してみよう。それによると、

- 1) 関心のある主題を選ぶこと、
- 2) 論文作成の目的を決めること、
- 3) 論文における中心的な考えを表現する命題を書くこと、
- 4) 読み手を考慮すること、
- 5) 論文を弱めるものを取り除きながら、予備リストにおける自分の考えと情報を集めること、
- 6) 論文の目的に合う順に資料を並べ、方法、即ち持論を展開するのに用いる方法を決めること、
- 7) 書いていくに従って、枠組みを保つ詳細な概略を構成すること、
- 8) 明解な序論、本文、結論を確認しながら、予備的な原稿を書くこと、
- 9) 予備的な原稿を批判的に読み、より効果的になるように言葉を代え、順序を代え、取捨しながら、原稿を直すようにすること、
- 10) 最後の訂正をして最終原稿を読み直すことである。

MLAのハンドブックは10段階に分けて論文作成過程を描いている。その内、フィードバック作業を除去して表すと、それは、1)トピックスの把握、2)命題、仮説の設定、3)章の構成、4)章の概略、5)原稿を書くことである⁵⁾。論文作成過程は、読む、メモをとる、考える、書くという作業を繰り返して螺旋状に新たな次元へ発展していく過程で、そして一定の段階に到達して論文として完成する。その過程の中で読む行為にかかる比重は高い。読むという観点から論文作成過程を見ると、トピックスを選ぶ時に、既に入門書を、概略を知るために百科辞典に目を通して見ている。さらにトピックスを深く理解するために研究書や雑誌論文を読む。事項を調査する場合、事



第1図 論文作成と6つのカテゴリー

典・辞書を使う。また裏付けのために様々な資料を用いる。論文の書き方、言葉の言い回し方もマニュアルで学ぶ。さらに上述した資料を深するためのガイドブックも必要になる。概観すると、文献探索過程は6つのカテゴリーに分けることができる。6つのカテゴリーとそれに伴う工具を上げてみると、それは次のようになる。

1) トピックスの把握

論文を書く際には、まず関心のあるトピックスを限定して、テーマを設定していく。またそのトピックスを大きな観点や視点で把握したり、また一般的な視点で捉えるために、入門書や百科辞典をみる。さらにそのテーマと現在の研究状況との関連を考えて、これから行う研究の意義付けを行う。その工具として学会誌や研究案内がある。

2) 図書館・文献探索法

トピックスや概要を把握したら、次の段階としてそのトピックスを深く知り、さらにテーマに関する研究書や論文を読む段階に入るが、それ以前にそれらを探す方法

を知らなくてはならない。まず図書館の施設、サービスの概略を知るオリエンテーションを受け、さらに文献の探索法や参考図書類を紹介するBIを受けて図書館利用と文献探索法を系統的、体系的に理解する。そしてオリエンテーションやBIのほか、知識の拡大に役立つガイドがある。

3) 文献探索

図書館利用や文献探索法を知った後、実際に文献目録でトピックスに関わる研究書や雑誌論文を探す。この場合、探す目的によって文献目録を選ぶ必要がある。主題、内容、時期、累積、継続、抄録などの種類のほか、メディアの多様化に伴い冊子体、CD-ROM、オンラインなど様々な形態で出されている。そしてカード目録、OPAC、総合目録によって所在の有無を確認して、閲覧する。

4) 事項調査

研究書や雑誌論文を読む過程において分からない事項、人物、字句が出てきた場合、事典・辞書を使う。事項や事実の確認は、事典・辞書に限らず、年表、地図、年鑑などの参考図書を用いる。

5) 検証

仮説を構築したり、ある仮説を論証するにはその裏付けとなる資料、データが必要となる。検証材料には、政府刊行物、議会資料、統計、法令・判例、日記・書簡などの私文書、古文書、観察・観測・実験データなどがある。

6) 論文の書き方

読む、メモをとる、考える、書くという作業からなる論文作成過程のなかで、最後の段階が読者に理解しやすく、説得力のある論文を書くことである。その技術、即ち論文の構成、脚注の付け方、文法の用法、表現の方法については、論文の書き方のマニュアルを使う。

文献探索過程を詳細に分析して行くと、6つのカテゴリーからなり、論文作成の進行、深化に伴って、概説書、入門書、研究書、雑誌論文、文献目録、事典・辞書、資料、マニュアル、ガイドブックなどそれぞれ目的に見合った工具を利用する。そして6つのカテゴリーこそ、論文作成に必要な基本的な要素であり、BIに組み込まれるべき内容と言える。

III. 図書館・文献探索法についての知識の提供

図書館は、図書館・文献探索法についての知識の提供を様々な形で行っている。開館時間、目録についての利

用案内パンフレット、広報活動としての館報、図書館の概略、施設、サービスを紹介するオリエンテーション、文献探索法を指導するBI、そして尋ねてきた際に提供するレファレンス・サービスなどがある。一方、自主的な文献探索の手掛かりになるガイドや、参考図書を紹介したガイドが出版されている。こうした図書館・文献探索法についての知識の提供サービスや工具は、それぞれ目的があり、ここでは、論文作成に直接関わるBIと各種ガイドを取り上げて、それらをレファレンス・サービスとの関連において論じていくことにする。

A. ゼミに沿ったBI

BIとレファレンス・サービスとの関係は、情報量の増大、情報のメディアの多様化、そして図書館の巨大化とともに変化してきている。レファレンス・サービスとBIとの関係を対立的にとらえたのが、今日的なBIの萌芽状況にあった60年代半ばのシラーの論文である⁶⁾。80年代に入り、BIが定着化するにつれて、レファレンス・サービスとBIを相互補完的な関係に捉えるようになってきている⁷⁾。レファレンス・サービスのテキストとして評価を得ているウィリアム・カッツの *Introduction to Reference Work* 第4版⁸⁾には“Bibliographic Instruction,,” ないし“Library Instruction”という言葉は、巻末の索引に出てきているに過ぎないが、第5版には索引のほか、章として“Bibliographic & Enduser Searching Instruction”が設けられており、BIの定着化に伴って、カッツは論文作成とレファレンス・サービスにおける労力軽減の2つの側面から言及している⁹⁾。

一般に論文作成には自立性が要求されると同様、図書館利用、文献探索にも自立性が要求される。したがって学生に図書館利用、文献探索についての知識をできるだけ与え、さらに自分で探せない時にでも適切なガイドで解決できる環境を作ることが必要である。そして自分で解決できない状況に直面した場合初めてレファレンス・カウンターを尋ねる形が、論文作成に見合う図書館利用法と言える。

BIは教員や学生の要望、カリキュラムや図書館の事情に応じて様々な形で実施されている。“one-shot lecture”や“course related BI”と呼ばれるゼミに沿ったBI、レファレンス・サービスの一環としてインフォーマルに行われるBI、カリキュラム化され図書館員によるBI、カリキュラム化され教員によるBIなどがあ

る¹⁰⁾。そこで日本、米国でも最も普及しているゼミに沿ったBIに焦点を当てて論じていくことにする。

ゼミに沿ったBIは一般的に次のような形で実施されている。ゼミの指導教授か、ゼミ委員がBI・コーディネーターと呼ばれるレファレンス・ライブラリアンにBIの依頼をする。専攻、人数、日時などを聞いて、BI・コーディネーターは担当を決め、日程等と調整するわけである。ゼミの時間帯に行なわれることが多いために、時間は90分程度である。説明内容は文献探索法、ゼミ専攻科目における基本的な文献目録の紹介が中心である。そして簡単な館内ツアーが行われるケースが多い。

このように実施されるゼミに沿ったBIは固有な特色を持っている。BIは図書館・情報についての知識をアプライオリに提供し、効率よく自立的に図書館を利用できるようにし、文献を探索できるようにすることを目的としている。例えば、索引・文献目録からある雑誌論文を見つけてそれを探索する過程を想定してみよう。自館の雑誌所蔵目録を探し有無を確認し、有れば配架場所に行く。一方自館に無ければ、他館の蔵書目録や総合目録を調べて有ればレファレンス・デスクで紹介状を持って所蔵館へ自分で行くか、或は遠方の図書館であるなら、郵便で複写依頼を出す。この過程における行動パターンの系統性と、情報環境の体系性、拡大性を提示している。つまり例外的な要素をできるだけ排除して一般化された要素のみ説明し、汎用性を重視するわけである。

そしてBIで得た図書館・文献探索法についての知識は、実践の場として論文作成過程において初めて活かされる。文献探索において困難な問題に直面した時、BIで記憶した知識を再生して問題解決を自立的に計る。

ところで、ゼミに沿ったBIは、文献探索法に重点をおいているために、総合的な図書館・文献探索法についての知識の提供と言う観点から見ると、必ずしも充分でない側面がある。そこでゼミに沿ったBIの不十分さを取り上げてみることにする。まず、第一に論文作成過程における6つのカテゴリーを必ずしも含んでいないことである。文献探索法、トピックスの理解のために入門書、研究書や雑評論文を探す文献目録の使い方と紹介、事項を調べる事典・辞書の紹介、検証のために用いる基本的な資料の紹介、論文の書き方のマニュアルの紹介などの内容は、論文作成に不可欠である。しかしながら、ゼミに沿ったBIでは文献探索法に伴う文献目録、カード目録の使い方や紹介に焦点が当てられており、それ以外のカテゴリーは内容に含んでいない。そして時間的な

制約のため、すべてを紹介することは不可能に近いのである。

第二に、分野別の基本的な文献目録や事典・辞書を取り上げるに過ぎないことである。詳細なガイドはパスファインダーとして配られる場合があるが、あくまでもその専攻にかかわる参考図書に限られる。研究分野の多様化が進む現在、分野によっては、他の分野の研究成果に依存する面が出てきている。政治理論、政治思想、政治史、国際関係から構成される政治学において、マックス・ウェーバーにおける政治思想について研究する場合を考えてみよう。ウェーバーの研究業績は幅が広く、単一の学問分野で表現することは不可能である。ウェーバーについての概説書である住谷一彦の『マックス・ヴェーバー』においては、ウェーバーの研究業績を紹介し、その多彩なことを示している¹¹⁾。またウェーバー研究を見ると、社会学、宗教学、政治学、行政学、経済学、哲学、歴史学などあらゆる角度から研究がなされている。したがってウェーバーを政治学的側面から研究する場合でも、政治学以外の分野も無視できないのである。

隣接、学際的な研究に少し目を向けてみよう。エズラ・ヴォーゲルの *Japan As Number One*¹²⁾ やジョン・フェアバンクの *The United States and China*¹³⁾ など所謂地域研究は、歴史、地理、政治、経済、社会、教育、文化など多くの学問分野と関わっている。また社会史研究の一派であるアナール派の代表的なルシアン・フェーブルの『フランス・ルネサンスの文明』¹⁴⁾ においては古地図、版画、絵画を手がかりに議論を進めている。さらに次のような研究もある。江戸時代を自然現象、国際関係、経済政策、市場、生活文化、大衆化社会、外国から見た日本など様々な視点から様々な分野の研究者によって論じたのが『歴史のなかの江戸時代』⁹⁾ である。このように研究の多様化、学際的な研究においては自分の主たる専攻以外の分野についての参考図書の知識が必要となってきた。ゼミに沿ったB Iにおいては、専攻分野を優先するので、学際的な研究への対応は難しいのである。

第三は、B Iを受ける学生の持っている図書館・文献探索法についての知識の程度が異なることである。ゼミというグループに対して行なわれるために、知識の個人差が無視される。ある学生はB Iで説明する内容が初めてなので非常に興味を示すが、他の学生は既知なことなので関心を示さないなどの状況が生まれ易い。本来は、プレテストの結果によって程度別にグループを分けて実施

することが理想的だが、多くの面で困難が伴う。説明内容を標準化したゼミに沿ったB Iは、知識レベルの相違、受講者のニーズを必ずしも満足させていない面がある。

第四に、B Iは手段を教わるに過ぎないことである。B Iはゼミに沿って行われるが、論文作成が学生にとって本来の目的である。図書館・文献探索法についての知識の学習は学生にとって目的でなく、あくまで論文作成時における文献探索の手段に過ぎない。その結果、ゼミに沿ったB Iは受講動機の消極的な面が残る。更に例を以って説明するが、ゼミに沿った内容であっても直接性が少なく、臨場感も乏しい。分からない時にレファレンス・サービスを尋ねる時は、本当に知りたいという切迫感や頭在化したニーズがあるが、潜在的ニーズに対応するB Iは、その面がレファレンス・サービスと比べて少ないのである。

第五に、ゼミに即した工具しか提供しないことである。ゼミに沿ったB Iはその目的を論文作成時に必要な文献収集に絞っているため、図書館・文献探索法についての知識としてのあらゆる形態、分野の参考図書を説明しない。日米間の輸出入量の統計は、国際経済専攻の学生にとって直接関係するが、古代日本史を専攻する学生にとって無縁である。しかしながら、統計情報については、新聞、テレビなどの報道により日常生活において無意識の内に関わっており、さらに卒業後の実社会において関わりが深くなる可能性を持っている。ゼミの専攻によっては用いない参考図書が多くある。情報社会と呼ばれる現代においてあらゆる情報に精通する学生を社会に送り出す役割を図書館は持っている。

このように見ていくと、ゼミに沿ったB Iを不十分さや限界性が残る。それらを補うサービス、工具が必要である。

B. 分野別ガイドと学際的なガイド

ゼミに沿ったB Iを見て来たが、自主的な文献探索についての学習を促進させたり、B Iを補足するガイド、様々な分野別ガイドが米国では多く刊行されている²⁾。そこでその中から例として4つ取り上げてその特色を示して見よう。

その分野の研究における特色を提示したガイドには、*The Modern Researcher*¹⁵⁾ がある。歴史研究の原則、研究、論文の3つの章から構成されている同書は、歴史の本質を説明すると共に、歴史研究の過程を示し、論文の書き方を紹介している。そして図書館の目録カードや

参考図書にも触れている。

図書館の利用や文献探索法を書いたガイドとしてピアリアン社の“Library Research Guide Series”が上げられる。同シリーズには教育、歴史、音楽、宗教、社会学などの分野がある。例えばシリーズ5の *Library Research Guide to Sociology*¹⁶⁾ はトピックスの設定、目録カードの見方、文献の見つけ方、参考図書の紹介、図書館の使い方について述べられており、特に図書館における文献探索に焦点を当てている。

参考図書を重点においた *How to Find out in Psychology*¹⁷⁾ は、心理学関係の事典、索引について紹介し、さらに参考文献を掲載している。また *Information Sources of Political Science*¹⁸⁾ は政治学関係の参考図書と、政府刊行物、外交文書、統計などの資料を上げている。

このように既刊の分野別ガイドは、説明の重点をそれぞれ研究、図書館、文献探索法、参考図書に設定して編集しており、必ずしも、トピックスの把握から論文の書き方まで、即ち6つのカテゴリーを総合的に扱っていないのである。

学際的な参考図書のガイドとしてシーヒの *Guide to Reference Books*¹⁹⁾ が一般的に図書館では使われている。シーヒの構成は一般、社会、人文、自然科学という学問領域の下に各学問分野毎に文献ガイド、文献目録、事典・辞書という形で構成されており、いわば各分野毎の参考図書ガイドを集めたものであると言える。その原型はクレーガが1902年に編集した *Guide to the Study and Use of Reference Books*²⁰⁾ に求められる。

クレーガの前書きによると、同書は図書館アシスタント、図書館学専攻の学生、研究者をその対象としている。その対象の中で最優先は図書館学専攻の学生である。クレーガの第1版、マッジの第3版、ウインチェルの第7版、シーヒの第9版、そして現在の第10版に引き継がれている。シーヒによると、参考図書の紹介という編集方針は第1版から変わっていないが、その対象が図書館学専攻の学生から図書館員に変わってきている¹⁹⁾。参考図書を分野別に構成し、それぞれの参考図書に解説を加える方法は、クレーガ以来ずっと継続されている。当初、図書館学専攻の学生が知っておくべき参考図書を解説し、1250点しか収録していない第1版であったが、第10版のように1万数千冊をも収録するガイドは、図書館員用の実務上の手がかりとして、図書館員が分からない時に調べる工具化している。シーヒのガイドは参考図書の類型化、概念を理解している図書館プロパーのためのガ

イドと言える。

シーヒの小型版として基本的な参考図書を網羅している *The New York Times Guide to Reference Materials*²¹⁾ が1971年から出版されている。同書は、図書館・文献探索法、タイプ別参考図書の紹介、分野別参考図書の紹介、情報の評価、論文の書き方から構成されており、論文作成の際に必要な要素をかなり満たしている。しかしながら、基本的にはシーヒと同じように分野の下に文献目録、事典・辞書などの参考図書を配列しているのである。

分野別構成による参考図書はその分野だけの研究については充足するが、学問分野の多様化に対応しにくい面がある。上述したウェーバーを例に挙げてみよう。ウェーバーについての図書・論文をリストアップする場合、まず政治学の文献目録、哲学、社会学、そして経済学の文献目録をみる必要がある。政治学の学生であれば、ゼミに沿ったBIを受け、政治学関係の文献目録を知っている。しかしそれ以外の文献目録は全く知らない。そのためにシーヒやニューヨークタイムズのガイドで他分野のを探すことになる。分野別構成の場合、政治学を調べ終わったら、次の分野を全く頁の離れた箇所を見に行かなくてはならない。シーヒは多くの分野の参考図書を収録しているが、文献目録を探す場合、隣接する分野の文献目録を探すには、一度「文献探索」という枠組みから離れて「分野」を見つけ、そして文献目録を探さなくてはならないのである。

一方、自分の専攻以外のものを探す場合、分野別構成の参考図書ガイドと比べて、6つのカテゴリーの下で分野毎に配列した方が、他分野だからという抵抗感なく探すことが可能である。6つのカテゴリーの一つである「文献探索」において一般、社会科学、政治学、社会学、経済学、そして人文科学、哲学などの文献目録を見ていけば、ウェーバーに関する図書・論文を探することができるのである。学問分野が多様化したり、隣接、学際研究が盛んな現在、それに対応する参考図書の配列が必要であり、そうした配列こそ、真の学際的なガイドと言える。

利用者サイドからガイドを論じてきたが、次にレファレンス・ライブラリアンからシーヒのガイドについて見ていくことにする。レファレンス・サービスは、利用者から質問内容を聞き出すインタビュー技術、その質問を分析する主題知識、その質問に関連する参考図書と結びつける直感力、参考図書や蔵書についての記憶力から成り立っており、そして図書館員が持っている図書館・文

献探索法についての知識、主題についての知識、パーソナリティに対する利用者の信頼の上に築かれている。

そうした環境で行われるレファレンス・サービスは、研究の多様化、細分化、学際化の状況にあって、シーヒのようなガイドに頼ざるを得なくなっている。例えば、上述したウェーバーに関する文献を探したいという質問を受けた場合、シーヒでは分野毎に文献目録を調べなくてはならない。シーヒは一見、分野別に構成されているので学際的なガイドと見えるが、一分野毎独立しているものであり、本来の学際、隣接研究に適していない。

参考質問は一般的に利用案内・指導、事項調査、所在調査と類型化される。参考図書を示して回答する質問を考えて見ると、ウェーバーについて文献を探そうとしている人には、総合的な文献目録や分野別文献目録を提示し、ウェーバーの著作である『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を探している人には蔵書目録や総合目録を教える。ウェーバー研究の新刊書を探している人には市販図書目録を提示する。また、ウェーバーの生没年については世界人名事典、ウェーバーの説く官僚制については百科事典、社会科学事典、政治学事典を紹介する。

レファレンス・サービスにおいて参考図書を提示して回答する場合、文献目録、所蔵目録、総合目録などの文献探索に使う工具か、人名事典、事典などの事項調査に用いる工具という枠組みで処理し、そして利用者の内容についての要求度の違いや、一般或は分野別の工具の有無に応じて工具を提示する。仮に参考図書ガイドにおいて、ある分野の文献を探す場合、分野毎で独立させるシーヒのようなタイプに比べて、「文献探索」というカテゴリーで分け、そしてそのカテゴリーの下に一般から分野別文献目録を包括して構成したガイドの方が、レファレンス・サービスの回答に適合するやり方である。このことは既に述べた論文作成過程で分析した6つのカテゴリーにも一致するものである。

図書館・文献探索法についての知識、とりわけ文献探索法に力を入れたゼミに沿ったBIと、分野別及び学際的ガイドを見てきたが、様々な面で不充分さと限界性が残る。こうした不充分さと限界性を補う新しいガイド、すなわちゼミに沿ったBIにない面を補い、従来と異なる視点で見た参考図書ガイドが必要である。それはいわば「セルフBIガイド」とでも呼ぶべきガイドである。それは、つまり6つのカテゴリー、分野性、学際性への

拡大性、参考図書の種類とメディア、図書館・文献探索法についての知識のレベル、動機などを考慮した複合的な要素、機能を兼ね備えたBIである。

IV. 学際的なセルフBI・ガイド

新しい形のBI、セルフBI・ガイドの必要性を説いたが、セルフBI・ガイドを図書館が従来から行ってきたオリエンテーション、ゼミに沿ったBIや、レファレンス・サービスとの関係をどのように捉えるべきなのであるか。そこでBIの原点に帰り、教授—学習過程の見地からセルフBI・ガイドの性格を明確にし、その構成要素について検討することにする。

A. セルフBI・ガイドの性格

ゼミに沿ったBI、カリキュラムに組み込まれたBI、そしてセルフBI・ガイドは、利用指導、教育と呼ばれる如く、その本質は教授—学習過程であり、従ってあらゆるBIは、単に図書館・文献探索法についての知識を提供するのではなく、教育学における教授—学習理論に基づいて行われるべき性格を持っている。一般的に教授—学習理論は、パブロフの刺激—反応や、部分から全体をみていく行動理論、教育発展段階を重視して全体から部分へと見ていく認知科学、入力と出力とを重視するサイバネティクスがある。米国においては既に多くの研究者が学習理論をBIに適用して分析している²²⁾。BIは自立性を高め、図書館・文献探索法についての知識の拡大を目的としている。一般的に認知科学は、こころの科学であり、知識の理解・生成・発達を扱う科学であり、モデル構築の科学と言われている²³⁾。そこで、教授—学習過程に情報処理理論を結び付けているロバート・ガニエの理論を参考にして、認知科学からBIにおける教授—学習過程に焦点を当ててみていくことにする。まずガニエは学習を次のように表している²⁴⁾。

学習理論は、情報処理理論である。このタイプの理論によれば、学習現象の説明において考慮すべき心的過程である。例えば、学習場面において、学習者の目、耳その他の感覚に生じた刺激興奮は一定の神経的メッセージに変換される。そのメッセージは、貯蔵、再生ができるように神経組織のなかで変換される。再生された情報はさらにその他の種類のメッセージに変換され、その人の行為をコントロールする。その結果、ある実行行為が学習されたことを示すスピーチやその他の動作があらわれ

るのである。

ガニエは以上のように学習過程を要約している。即ち、受け入れた情報はその受取り手が従来からその情報について持っていた知識と結合して、加工・変容された情報を持つようになる。そして実際の場面においてその情報が活用される。ガニエの理論をBIに置き換えると、オリエンテーションや、以前から図書館利用で体得していた事に、BIで得た情報が融合し、そして論文を書く際に用いる文献を探す時に、自分が持っている図書館・文献探索法についての全知識を記憶の中からその事象に見合う知識を呼び起こしてそれが実践で活かされる。この過程が図書館・文献探索法についての知識の提供を情報処理論から見た教授-学習理論である。

知識を発展段階的に捉える認知理論に基づいてBIを見ていくと、BIを学生の図書館・文献探索法についての知識の把握に応じたBIが必要である。学生はまず図書館におけるサービスの概略をオリエンテーションで知り、そしてゼミに沿ったBIを受ける。そして実際に利用して分かなければ、図書館・文献探索法についての知識を扱っているガイドを自分で見ることによって問題を解決する。そして自分で解決不可能な場合、レファレンス・サービスを尋ね、個別的に、詳細に、深く情報を得る。こうした形が論文作成に伴う図書館・文献探索法についての知識を得る理想的過程である。教授-学習、いわゆる教育は自分による問題解決をすることを第一義的に考えているからである。

既に述べてきたがゼミに沿ったBIには固有な問題を持っている。また情報探索における自立性を目指すBIは、レファレンス・サービスへの過度の依存はその意図と背反する。こうして見るとBIとレファレンス・サービスをつなぐ図書館・文献探索法についての知識を自主的

に学習するガイド、セルフBI・ガイドが必要と言える。

そしてそうしたガイドには、認知理論に基づいた内容が必要である。入力である教授と出力である学習の両面をガニエの理論から説明すると、指導の側面を時系列的に9つの段階に分けて説明している²⁶⁾。そこですべてのBIに共通する内容である文献探索法の紹介を例にあげながら、述べていくことにする。

1) 注意の獲得

学習者が注意を引くように指導する人は絶えず工夫している。「論文作成のための文献収集をする時には、何で調べるか」とか、質問して関心を論文作成過程に結びつけようとする。この部分はいわば導入部である。

2) 学習者に目的を知らせること

文献目録を使えば、効果的に文献を探すことができることを示し、その意義、位置付け、重要性を説明する。

3) 以前に習得された能力の再生を刺激すること

カード目録には著者、書名、分類、件名など個別的な目録が、図書館にあった事を思い出せ、それとは異なる探し方であることを説明して文献目録に対する違和感を軽減する。

4) 刺激材を提示すること

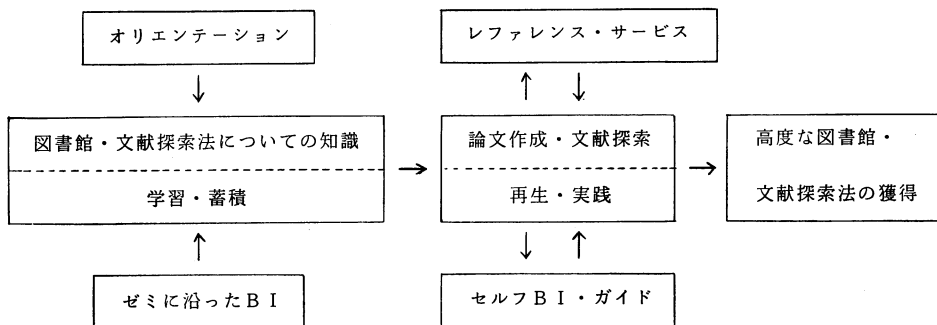
基本的な文献目録や、そのコピーを提示する。単なる説明だけの冗長性を防ぐ。

5) 学習の指針を与えること

目次でその文献目録の構成を知らせ、さらに本体の記述内容を説明する。そして巻末に出ている索引を紹介する。単純から複雑へ、一般から高度へと説明のレベルを上げ、ヒントなどを例示しながら、学習者に関心を持たせて軌道に乗せることに重点を置く必要がある。

6) 実行を引き出すこと

学習指導が充分になされた場合、学習者は学習内容と



第2図 図書館・文献探索法についての認知過程

内的に結びついた状態にある。そして実際に自分の関心のあるトピックスを引かせてみる。文献目録から読みたい資料を実際に見つけ出し、そしてその所蔵を調べて現物へのアクセスをさせてみる。

7) フィードバックを与えること

学習者に必ず探しているものがすぐに探すことができないということも示すようにする。収録範囲などが文献目録によって異なるので、多くの文献目録を調べる必要性を説く。

8) 実行の評価

正しく実行がなされたかを観察することは、学習成果の評価につながる。そしてそれは同時に正しく指導されたのかにも関わる。学習成果の検討は指導の内容、方法の改善に有効である。

9) 保留と転移の強化

記憶したことを実際に再生でき、さらに他の事象において応用できるかが、学習において大きな課題である。文献探索過程において正しく文献目録をできれば、冊子体以外のオンラインや CD-ROM のデータベース検索があることを提示する。保留と転移を高めることも B I の目的である。

このように B I を教授の側面から見ると、予備知識、理解、適応、応用と発展段階的に捉えることができる。そして B I は文献探索のパターンを認識させ、汎用性を活かすことに重点を置いているのである。

一方、出力としての習得されるべき能力についてガニエは 5 つの能力を上げている。それは、情報、知的技能、認知的方法、運動技能、動機である²⁵⁾。文献探索における文献目録やオンライン検索を例に挙げてみる。

1) 情報

情報とは、識別と推論の前提となる事実、概念、原理を指す。この情報を文献探索法に当てはめると、文献目録の役割、その構成、種類、効果的な文献探索法などについての基本的知識である。

2) 知的技能

読む、書く、話すなどの基本的技能であり、文献目録の見方、端末のキーインやファンクションキーの操作に相当する。

3) 認知的方法

認知的方策とは学習者が注意して聞く、習い、覚える内面的過程を制御する技能である。スベリングミスや、コマンドを間違えると、正確にヒットしないことや、キ

ーワード検索の場合、余りに一般的な言葉から引くとヒット数が多くて検索の意味が薄れることなどを把握することである。

4) 運動技能

身体を使って動かす動作が運動技能であり、端末機におけるキーインの動作などが具体的な例である。この運動技能の習得によってキーイン速度や操作の正確さの向上につながる。

5) 態度

態度は、学習しようとする意欲、努力であり、目的を持った活動への前提条件になる。検索するという意欲へは、具体的には、一度キーインして検索されなければ、他のアクセスポイントから検索する態度である。

文献探索法を例にして B I で学習される能力をとりあげたが、情報、知的技能、認知的方法、運動技能、態度の 5 つの能力は、図書館・文献探索法の理解において不可欠な能力である。あらゆる B I にはガニエの指摘する 9 つの指導の側面と、学習によって獲得すべき 5 つの能力が要求される。

このように認知科学から B I における教授—学習の側面を見ていくと、B I は図書館・情報環境における適応能力を総合的に指導することを意味する。そして各種の B I を利用者のニーズ、レベルに応じて展開していくことが必要である。つまりゼミに沿った B I、セルフ B I、そしてそれらを補うためにレファレンス・サービスを受ける形が、論文作成過程に適した図書館・文献探索法についての知識の提供である。

B. セルフ B I ・ガイドの構成

ゼミに沿った B I には、既に指摘したように不充分さが残る。既刊の分野別ガイドを見ても、6 つのカテゴリーを包括したものは刊行されていない。またシーヒのガイドは図書館員向けであり、それに類するものもその構成は分野別構成にしている。これらを補う意味で図書館・文献探索法についての知識を自立的に、能動的に学習できるセルフ B I ・ガイドの基本方針は次のようになる。

1) セルフ B I ・ガイドは、ゼミに沿った B I とレファレンス・サービスとをつなぐ媒体である。

2) 図書館・情報についての知識を体系的、系統的に提供し、自立的、効率的な図書館利用及び、文献検索を可

学際的なセルフビブリオグラフィック・インストラクション・ガイドの構築

能にする。

- 3) 論文作成における文献探索過程に沿うもので、トピックスの把握，図書館・文献探索法，文献探索，事項調査，検証，論文の書き方の6つのカテゴリーから構成する。
- 4) 認知科学における教授—学習過程に基づいた教授法と学習されるべき能力を組み込む。
- 5) 隣接，学際的な研究に対応する。
- 6) データベース化してC A I化を計る。

そしてその構成は6つからなる。

- 1) 文献探索過程における6つのカテゴリーを設定し，それぞれに学問分野，研究対象地域，使用言語，メディアなどの下位概念を設ける。
- 2) 各カテゴリーにおいては，それぞれの工具の役割を説明すると同時に，基本的な工具を例示し，使い方を説明する。
- 3) 全学問領域（人文，社会，自然科学）を包含し，それぞれの学問領域（例えば社会科学）の下位の各学問（例えば政治学）を並列的に配列する。

6つのカテゴリー	工具	メディア
トピックスの把握	入門書 百科事典 学会誌 研究案内	冊子 CD-ROM オンライン
図書館・文献探索法の把握	オリエンテーション B I 図書館ガイド 参考図書ガイド	冊子 プリント ツアー 講義 AV フロッピー
文献探索	継続・累積索引文献目録 抄録 遡及的文献目録 書評索引 特定文献目録 市販目録 一国書誌 蔵書目録 総合目録	冊子 CD-ROM フロッピー オンライン カード
事項調査	事典 人名事典 団体機関名鑑 語学辞書 年表 地図帳・地名事典 年鑑	冊子 CD-ROM フロッピー オンライン
検証	議会文書 政府刊行物 外交文書 法令 統計 古文書	冊子 マイクロフィルム CD-ROM フロッピー オンライン
論文の書き方	作文ガイド スタイル・マニュアル	冊子 CD-ROM フロッピー

配列例:文献探索-遡及的文献目録

一般
人文科学
音楽
・
美学
文学
・
・
社会科学
国際
言語区分
地域
言語区分
国
言語区分
経済学
国際関係
政治学
国際
日本語
英語
独語
・
アジア
日本語
・
アフリカ
日本国
米国
日本語
英語
・
自然科学
・
・

第3図 セルフB I・ガイドの構成，内容と配列例

- 4) 並列的に配列された全学問領域、各領域、各学問に研究対象を国際、地域、国の順に配列する。
- 5) 研究対象地域の下位概念として使用言語、あるいは出版国を設ける。
- 6) 個別の参考図書において冊子体を優先して配列し、他のメディアがあるものについてはそれを併記する。

セルフ B I ・ガイドは、ゼミに沿った B I の補完的な役割を演じ、自分で図書館・文献探索法についての知識を拡大していくことが可能である。そしてこうした構成を考慮すれば、学問、研究の多様化に応えることができると同時に、自分の専門以外の分野の文献探索を容易にするのではないだろうか。6つのカテゴリーによって現時点で自分が求めているものを明確にし、そして分野を限定するガイドの方が、論文作成過程に沿った構成なので分かりやすいのである。

V. おわりに

図書館・文献探索法についての知識の提供はゼミに沿った B I によって行われているが、それは必ずしも全論文作成作業を満足させていない。論文作成過程を文献探索から見ると、トピックの把握、図書館・文献探索法、文献探索、事項調査、検証、論文の書き方の6つのカテゴリーに分けることができる。6つのカテゴリーを充足するサービス、ガイドは見あたらない。この条件を満足させるのが、本稿で述べてきたセルフ B I ・ガイドである。

図書館・文献探索法についての知識を得る方法として、図書館の概略を知るオリエンテーション、文献探索を重視したゼミに沿った B I が実施され、そしてそれを補うためにセルフ B I ・ガイドがあれば、学生は自立的な文献探索ができ、また様々な問題に直面した場合にでも自立的、能動的に問題解決が可能になる。つまりセルフ B I ・ガイドにより、論文作成過程に生じた図書館利用不安症候群の緩和が可能になる。そして自立的に解決が困難な時にレファレンス・サービスを尋ねる。こうしたステップを踏んだ文献探索過程は、論文作成の意図に叶ったものである。観察力、思考力、表現力を重視する論文作成は、持論を展開するために自立性が要求されるからである。

- 1) Mellon, Constance A. Library anxiety: a grounded theory and its development. *College*

- and Research Libraries. Vol. 47, No. 2. p. 160-165 (1986)
- 2) Ichiko, Kenji. An Interdisciplinary Guide to Reference Books on Area Studies, Japan. Chicago, 1988. 77p. 本稿で述べるセルフ B I ・ガイドの原型は、同書である。なお本稿は作成した際に考慮した構成要素を基にして書いたものである。
- 3) 速水融編. 歴史のなかの江戸時代. 東京, 東洋経済, 1977, 242p. (東経選書)
- 4) Gibaldi, Joseph and Walter S. Ahtert. *MLA Handbook for Writers of Research Papers*. 3rd ed. New York, MLA, 1988, 248p.
- 5) 次のハンドブックを参考にした。Laurie G. Kirzner and Stephen R. Mandell, *The Holt Handbook*. 2nd ed. New York: Holt, 1989, 1v, Thomas S. Kane, *The Oxford Guide to Writing: A Rhetoric and Handbook for College Students*. Oxford: Oxford UP, 1983, 820p.
- 6) Schiller, Anita R. Reference service: instruction or information. *Library Quarterly*. Vol. 35, p. 52-60 (1965)
- 7) Nielsen, Brian. Teacher or intermediary: alternatives professional models in the information age. *College & Research Libraries*. Vol. 43, No. 3, p. 183-191 (1982)
- 8) Katz, William. *Introduction to Reference Work*. 4th ed. New York, McGraw-Hill, 1982, 2vols.
- 9) Katz, William. *Introduction to Reference Work, volume II: Reference Services and Reference Processes*. 5th ed. New York, McGraw-Hill, 1987, 237p.
- 10) 市古健次. 3つの視点から見た米国大学図書館 — 授業・論文・利用者サービス. *大学図書館研究*. 第34号. p. 41-48 (1989)
- 11) 住谷一彦. マックス・ヴェーバー — 現代への思想的視座. 東京, 日本放送出版協会, 1970, 284p. (NHK ブックス 115)
- 12) Vogel, Ezra. *Japan As Number One: Lessons for America*. Cambridge, MA, Harvard UP, 1979, 272p.
- 13) Fairbank, John K. *The United States and China*. 4th ed. Cambridge, MA, Harvard UP, 1982, 632 p.
- 14) Febvre, Lucien. (二宮敬訳) フランス・ルネサンスの文明. 東京, 創文社, 1981, 181 p. (歴史学叢書)
- 15) Barzun, Jacques and Henry F. Graff. *The Modern Researcher*. 4th ed, New York, HBJ, 1985, 450p.
- 16) McMillan, Patricia and James R. Kennedy Jr. *Library Research Guide to Sociology: Illustrated Research Strategy and Sources*, Ann Arbor, MI, Pierian, 1981, 70p. (Library Research

- guide series, 5)
- 17) Borchard, D. H. and R. Francis. How to Find out in Psychology: A Guide to the Literature and Methods of Research. New York, Pergamon, 1984, 189p.
 - 18) Holler, Frederick L. Information Sources of Political Science. 4th ed. Santa Barbara, CA, ABC-Clio, 1986, 417p.
 - 19) Sheehy, Eugene. Guide to Reference Books. 10th ed. Chicago, ALA, 1987, 1560p.
 - 20) Kroeger, Alice Bertha. Guide to the Study and Use of Reference Books: A Manual for Librarians, Teachers and Students. 1st ed. Chicago, ALA, 1902, 104p.
 - 21) McComick, Mona. The New York Times Guide to Reference Materials. Rev. ed. New York, Times Books, 1985, 242p.
 - 22) Aluri, Rao and Mary Reichal. Learning theories and bibliographic instruction. Carolyn A. Kirkendall ed. Bibliographic Instruction and the Learning Process: Theory and Motivation. Ann Arbor, MI, Pierian, 1984, p. 15-27. 文献リストには, Judy Johnson, "Application of Learning Theory to Bibliographic Instruction: An Annotated Bibliography," *Research Strategy* 4 (1986): 138-141. がある。
 - 23) 渕一博編著. 認知科学への招待—第五コンピュータの周辺. 東京, 日本放送出版協会, 1983, 223p. (NHKボックス 446)
 - 24) Gagne, Robert. (北尾倫彦訳) 教授のための学習心理学. 東京, サイエンス社, 1982, 199p. (ライブラリ教育の心理学2)
 - 25) Gagne, Robert and Leslie J. Briggs. (持留英世, 持留初野訳) カリキュラムと授業の構成. 京都, 北大路書房, 1986, 403p.